

平成20年度質の高い大学教育推進プログラム審査結果表【選定】

機 関 名	青山学院大学				
取 組 名 称	学士力としての論理的文章作成能力育成				
取組学部等	全学				
申 請 区 分	上記以外の工夫改善を主とする取組				
整 理 番 号	A31042	申 請 の 形 態	単 独	取 組 期 間	3 年
申請の分類	教養教育	ICT	その他		
キーワード	客観的・論理的な文章理解・作成, 校正・推敲, e-learning, ツール, 技術的な裏づけ				

<選定理由>

本取組は現代学生に欠けているといわれている文章力、とくに論理的文章作成能力の育成を目指したプログラムである。特に、日本語文章力の育成をある意味で不得手としていたeラーニングに、その機能を付与しようというチャレンジングなプログラムといえる。言語処理とIT技術を活用した教育システムにより、より実効的な教育を実践し学士力を付与しようという本プログラムの成功が、他大学に与える影響も大きいと言える。

ただし、一般的な文章力を超えて論理的思考力を養うことが本当に可能か、いかなる専攻分野に対しても有効か、果たしてIT技術のみでカバーできるか、申請書にもあるBlended Learningにおける対面型授業での教員の授業力が十分であるか、eラーニングに対して学生が自主的に取り組むか、など今後の課題も考えられる。専門性・個性・創造性が課題となる論理的文章の作成能力をコンピューター技術を駆使することで可能とすることは、大きくかつ重要な社会的実験かもしれない。本取組みの担当者、関係者の多大な努力と成果を期待したい。

取組の概要【1 ページ以内】

専門領域に関わらず、現代日本人の母国語表現力、特に客観的・論理的な文章理解・作成能力の育成は、IT スキル育成と並んで今日の大学における必須の課題である。現状において、レポートや論文といった客観的・論理的な文章理解・作成能力低下は著しく、その訓練は不十分であるが、専門領域を問わずすべての大学生にとって必要な素養であるとの認識は社会的に定着している。その結果、文章作成能力育成そのものが教育対象として認知され、基礎教養教育の一部として組み込まれ、教員による対面授業形態でのカリキュラム実施が多く見られる。

ただし、文章力を養成するためには、講義のみでは力がつかず、演習・実習によるトレーニングが必須である。しかし、そこまでの対応を教員に任せて実施するのは不可能である。そこで、本取組では、次のようにしてこの課題解決を可能とする。

[客観的・論理的な文章理解・作成能力育成のために解決すべき課題]

客観的・論理的な文章理解・作成能力の育成のための全学規模のプログラム実施を実現させるには、e-Learning 化の遅れの解消と人的な関与の低減が必須課題である。適切な教材作成と ICT 環境での演習を可能なものとし、最小限の教員の関与で実施可能な理論的・技術的な裏づけをもった教育システムの提案が必要となる。

[本取組の目的：客観的・論理的な文章理解・作成能力育成]

①客観的・論理的な文章理解・作成能力育成のために、文章理解支援システム、文章作成支援システム、問題自動生成支援システム等を構築し、技術的に確立させ、②システムを有効活用した演習を通じて、自ら考えながら客観的・論理的な文章理解・作成能力を身につけさせる教育システムを構築・提案し、③提案された教育システムにより客観的・論理的な文章理解・作成能力を全学的に担保し、分野を問わず、個々の学生の専門教育へのスムーズな移行を可能とする。

取組を進めるための要件としては、①システムを支えるツール群（校正・推敲、論理構造デザイン、教材作成、出題者ツール）などの整備、②文章作成についてのエキスパートである日本語教育の専門家との連携、特色 GP 等で進められてきた他大学の取組のノウハウを導入することによるコンテンツの充実化と教育方法論の開発、③実践的な実施体制のもとに多人数教育システムの構築と充実化を図ることである。

具体的な教育目標は、下図に示すとおり自学自習の必須項目の学習システムであるベーシックコース、各学部教育課程の中で適宜活用可能なシステムとして、論理的な文章設計を目指したカスタム・アドバンスドコースを展開していくことである。

運用体制は、本学情報科学研究センター内にプロジェクト推進室を配置し、開発と運用の2グループが、日本語処理技術、客観的・論理的な文章理解・作成のためのルール、教育方法論から、教育環境の構築、教材の開発と演習問題の作成を行う。その他に支援組織を構成し、それぞれ独自の観点から本取組を支える。

